

令和5年度 第1回 静岡市立小学校及び中学校通学区域審議会 会議録

- 1 開催日時 令和5年7月28日(金) 14:00～15:30
- 2 開催場所 静岡市役所清水庁舎 3階 304会議室
- 3 出席者 <出席委員>望月俊昭委員長、小木曾委員、小澤委員、望月英夫委員、
荒委員、谷口委員、中村委員、三津山委員、隅倉委員
<事務局> 赤堀教育長、青嶋教育局長、本野教育局次長、
北川教育調整監、松田課長補佐兼学事係長、木村主査、
佐津川指導主事
<欠席委員>服部委員

4 議 事

<1 報告事項>

- (1) 小学校児童数・学級数及び中学校生徒数・学級数の実績及び推計について

5 会議内容要約

【開会】

【委嘱状・任命書の交付】

【教育長挨拶】

【委員の自己紹介】

【事務局職員の自己紹介】

【通学区域審議会の概要】

【議事】

(望月俊昭 委員長)

それでは、令和5年度第1回静岡市立小学校及び中学校通学区域審議会の議事に入らせていただきます。

本日の会議録署名人につきましては、私の他に1名の委員をお願いすることになります。望月英夫委員にお願いしたいと思いますが、望月委員、いかがでしょうか。

(望月英夫 委員)

はい。

(望月 委員長)

よろしくお願ひいたします。

それでは、議事に入ります。本日の内容は、報告事項1件です。報告事項(1)「小学校児童数・学級数及び中学校生徒数・学級数の実績及び推計」について、事務局より説明をお願いいたします。

(事務局)

小学校児童数・学級数及び中学校生徒数・学級数の実績及び推計についてご説明いたします。

お手元の資料「報告事項」の1ページをご覧ください。静岡市教育委員会では、令和5年5月1日の在籍数をもとに、市内各小中学校の入学率・社会増減率及び学年進級率を加味しながら、令和6年度から11年度までの推計を算出いたしました。入学率というのは、学区に住んでいる入学前の5歳児や11歳児が、翌年4月に実際に入学した割合のことです。社会増減率というのは、学区に住んでいる3～5歳児や9～11歳児の人数をその3年前の人数と比較した割合です。くわしく説明いたしますと、小学校の場合は、小学校区に住んでいる3年前の0から2歳児が、3年後の今年度、3～5歳児になるまでに、何人増減しているかの割合を出し、それを3で割って1年間の平均を求めたものです。同様に中学校の場合は、中学校区に住んでいる3年前の小学校1～3年生が、3年後の今年度、4～6年生になるまでの割合を算出して求めます。学年進級率とは、学年初めの児童生徒数と学年終わりの児童生徒数を比較した割合です。くわしく説明いたしますと、小学校の場合、過去3年の、その小学校の1年生から5年生までの児童数を、次年度2年生から6年生に進級した児童数と比較し、3年間で平均どれくらい増減しているかの割合を出したものです。中学校の場合は、1年生と2年生の生徒数を、次年度の2年生と3年生の生徒数と比較し、割合を出します。

続いて、1枚めくっていただき、2ページと3ページの表をご覧ください。

はじめに、2ページの表の見方をご説明いたします。

平成13年度から令和5年度までの小学校の学級数・児童数と、令和6年度から11年度までの推計の表です。二重線がひいてあります令和5年度の欄をごらんください。各学年の学級数と児童数が記載されています。この欄に記載された数字は、今年の5月1日現在の実際の数字です。左側の1年生の部分をご覧ください。今年の5月1日現在の小学校1年生の通常学級の数は、静岡市全体で、166学級、小学校1年生の通常学級の児童数は、市内全体で4,555人おります。上段の145という数字は、今年の5月1日現在、特別支援学級に在籍する小学校1年生の児童数を表しております。

したがって、静岡市内の小学校1年生の児童人数は、通常学級の4,555人と特別支援学級の145人を合わせた4,700人になります。続けて、右側の合計の欄をご覧ください。今年度は、静岡市全体で、通常学級の単学級が1,018学級、複式学級が33学級あり、28,678人在籍していることを示しております。また、特別支援学級は、静岡市全体で186学級あり、1,043人在籍していることを示しております。したがって、本年度の小学校の学級数は、通常学級の単学級1,018学級、複式学級33学級と特別支援学級の186学級を合計した1,237学級になります。そして、小学校の児童数は、通常学級の28,678

人と特別支援学級の1,043人を合計した、29,721人になります。

同様に、3ページは、中学校の学級数・生徒数の平成13年度からの実績、令和6年度から令和11年度までの推計をまとめてあります。二重線がひいてあります令和5年度の欄の左側、1年生の部分をご覧ください。今年の5月1日現在の中学1年生の通常学級の数は、静岡市全体で、159学級、中学校1年生の通常学級の生徒数は4,697人です。上段の特別支援学級に在籍する生徒数149人と合わせると、静岡市内の中学校1年生の生徒数は、通常学級の4,697人と特別支援学級の149人を合わせた4,846人になります。右側の合計の欄をご覧ください。今年度は、静岡市全体で、通常の単学級が466学級、14,028人在籍しています。また、特別支援学級は、静岡市全体で90学級あり、467人在籍していることを示しております。したがって、本年度の中学校の学級数は、通常学級の単学級466学級と特別支援学級の90学級を合計した556学級になります。そして、中学校の生徒数は、通常学級の14,028人と特別支援学級の467人を合計した、14,495人になります。

通常学級と特別支援学級を合わせた各年度の児童数、生徒数の実績と推計を、令和5年度を100%とした割合が、2ページと3ページの表の一番右側の数字になり、それをグラフにしたものが実線の黒色のグラフになります。これを見ますと、静岡市内の児童生徒数は減少傾向にあり、今後も減少傾向は続くと思われます。また、特別支援学級も含めた数を、今年度と令和11年度の推計値で比較すると今後、令和11年度までの6年間で、小学生が約6,800人、中学生が約2,000人減少することが予想されます。続けて、特別支援学級に在籍する児童生徒数の推移についてです。平成13年度から今年度までの特別支援学級に在籍する児童生徒数を同様にしてグラフ化したものが、点線の緑色になります。これを見ますと、児童生徒の全体数が減少していく中で、特別支援学級に所属する児童生徒数は増加傾向にあり、今後も増加していくことが予想されます。

以上、本年度の「小学校児童数・学級数及び中学校生徒数・学級数の実績及び推計について」報告させていただきました。

(望月 委員長)

どうでしょうか、皆様。今説明があったものについて、ご意見やご質問がありましたらお願いいたします。

(中村 委員)

自治会でも、人がかなり減ってきていて、世帯数も減っているんですけど、そういう関係でも、やはり若い人たちが、みんな町の方へ行かれるもんですから、田舎の方がだんだん寂れてきて、それでやっぱり人口も減ってくるんですけど。山の方へ来て過ごすというのが、なかなか条件的に難しいのではないかと思います。その辺、いろいろ工夫しながらやっていますが、なかなか山には来てくれないというのが厳しい現実でございます。どうしてもやはり子供の数を増やそうと思っても、なかなかその辺のところ

が、子供をいっぱい連れてきて入ってくる人もいるのですが、何かの関係で、やはりすぐに出ていっちゃうというような感じが、今かなり多いものですから、その辺をどういうふうにして食い止めていくかが一番の問題点になっているのではないのでしょうか。その関係で、静岡型小中一貫教育で何とかならないかと思います。一番そこが今、自治会としても危惧しているところです。子供がどんどん減っていくことは寂しいことだなと思います。

(三津山 委員)

すいません。これは全て公立のことを言っているんですよね。

(事務局)

はい。

(三津山 委員)

私立の方は人数把握しているのですか。

(事務局)

人数は把握しています。公立学校から私立学校に行っている子もいます。

(隅倉 委員)

グラフを見ると、小学校の支援級の子供たちの数は平成 22 年からなのですか。それとも、その年から統計を取り始めたということですか。

(事務局)

グラフのスペースの関係で、数字をうまく落とし込みができていませんでした。グラフの縦軸の一番下が 30%になっていますので、それよりも下は載せられなかったということです。支援級の理解が進んだことで、支援級に入るお子さんが増えたというふう聞いております。

(望月 委員長)

0%までグラフがあれば、よかったのかもしれないですね。

(小木曾 委員)

特別支援学級は、1クラス何人までと決まっているのでしょうか。通常級と同じように、人数の上限があるのでしょうか。

(事務局)

はい。ございます。1学級8人です。

(小木曾 委員)

支援級には種類があります。

(事務局)

知的学級と自閉症・情緒学級があります。

(三津山 委員)

今、非常に問題になっているのは、不登校の問題です。これはまた別かも分からないですけどね。不登校の人数は増えているのですか。年や学年によって違うと思いますが。

(事務局)

増加傾向です。しかも、近年増えています。コロナの影響がもしかしたらあるのかもしれない。

(谷口 委員)

いろいろ考えさせられるのですが、以前勤務していた葵小に来る前は、ずっと山の学校でしたものですから、山の方の問題も非常に大きいと思います。子供の数は激減しています。例えば、去年までいた葵小とは全く種類の別の、それぞれの問題があるということを感じました。例えば去年、学区を超えて入学してくる子どもが非常に多かったです。4割を超えていると思います。40%超えの子供たちが学区を超えてくると、基礎資料の3ページに載っていますように、何のために通学区域を設定しているかということになります。やはり子供たちの安全を考えて決められていまして、通学距離は小学校は4キロ以内と定められているのですけれども、子供たちが自分で通学できるという大前提があるのですが、バスで通わせますとか、そういうことは言いつつも、やはり車で送ってくる保護者の方が多いという状況です。やはり今は、災害級の大雨とか非常に多い

ときです。もうお分かりになると思いますが、お堀の周りが大渋滞になりまして、そこで交通事故が起きてしまうと、どこまで子供たちの安全を守れるかということで、非常に苦労した2年間だったなと思います。教職員も疲弊してしまっていて、どうにかならないかということでいろいろご相談をかけたことがあります。教室も増やすということで、子供の数は減っているのに教室は増やさなくてはいけないということで、図書室をなくして通常の教室にするなど、施設課さんとも協力しながら作ったという経緯がございます。ただ、学区外から来る理由としては、基礎資料の4ページにあるような理由をおっしゃってくるものですから、そここのところはなかなか止められません。通学区域そのものを何とか考えていただけないかということをご相談したところ、すぐに調べていただきましたが、防災や自治会などの関係でそう簡単に通学区域は変更ができないというご回答いただきまして、なかなか非常に難しい問題だと思いました。ただ、やはり子供の数も減ってきて、その中で、子供の命を最優先に考える場合、やはり通学区域というものを、皆さんでいろいろ考えるという時期は来ていると思います。

(隅倉 委員)

私のところは中村委員とちょっと違っていて、山間部ではないのですが、昔からの町中です。その学校は、どんどん児童数が減っているものですから、子育て世代が全部出てっちゃうんですよ。中心部から。特にそれは東北の震災以降に。川と海に挟まる地域もあるからです。そういうことで、子供の数がどんどん減ってまして、逆に周りの学区の中学校は減ってはいないのに、うちの学校だけどんどん減っていくという状態です。

(望月 委員)

先ほどの報告を聞かせていただくと、やはり児童生徒数の推移というのは、どうしても右肩下がりでですね。それとあわせて、自分の住んでいる学区の話じゃないのですが、自分の学区から行ける中学校が複数あるところがあるようです。人気がある中学と人気がない中学があって、こっちの中学へは行きたくないよってというような話があり本当に困っちゃうんだけど、というようなお話を聞いたことがあります。自治会と通学区域がマッチしていて、両者を断ち切るのがいいのか、昔ながらの繋がりそのまま維持して、成り行きに任せてくのがいいのかっていうのが、こういった資料を見ながら、私なりに思った感想です。

(望月 委員長)

ありがとうございました。委員の皆さんから、貴重なご意見をいただきました。それでは最後に、今年度の予定について、事務局より連絡をお願いいたします。

(事務局)

今年度の審議会ですが、第2回を10月24日火曜日午後2時開始、第3回を1月16日火曜日午後2時開始で予定しております。よろしくをお願いいたします。

(望月 委員長)

皆様のご協力により、スムーズに審議が行われました。ありがとうございました。では、以上をもちまして、本日の審議会を閉会します。

【閉会】